

【冒頭サンプル】

静かなロッカーの前で白のブラウスを脱ぎ、紺のタイトスカートのチャックも下ろす。ショーツからするりと抜いた足を、今度は競泳水着の穴に通していく。

くの字に折り曲げていた体を起こし、Hカップのおっぱいを収納していたブラジャーのホックを後ろ手で外した。

途端にぼろんとはみ出す、メロンサイズの豊満なおっぱい。私は眉間にシワを寄せ、片手で握っても余る柔らかいおっぱいを、競泳水着の中にぎゅうぎゅうと押し込んだ。

＊

「まずはいつも通り、プールの中でストレッチから始めましょう！」

イケメンコーチと評判の、海堂コーチの前に6人の男女がプールの中で間隔をあけて横並びになっている。プールサイドで簡単な準備運動を終えた私たちは、今度はプールの中で片足ずつ足首を回したり、太ももをあげたりなど、更なるストレッチを行った。

次は、うつ伏せの状態でプールサイドのヘリに掴まり、バタ足の運動。泳いでる最中に足がつかないようにと、入念に準備運動をするのがコーチの指導方針だった。

「皆さん、その調子でバタ足を続けて下さい」

「んっ、んっく……」

「池内さん、体が沈んでってます。力を抜いて」

「は、い……っっ」

返事をしたは良いものの、泳げない私はバタ足をすればするほど、体が水の底に引っ張られるかのように落ちていってしまう。水面で動かしていた両足も、どんどん水の中へと沈んでいく。

水中で必死にもがいていると、フッと体が浮いた。

「ひゃ……!」

「お腹を支えて、浮くようにサポートしますね。これで泳ぎやすくなるはずです」

「っ、ありがとうございます……」

お臍の辺りに感じる、コーチの温かい手のひら。頬がかあっと熱くなる。同時に、私の右側に立つコーチの背後から、痛い視線が飛んできた。

若い上にイケメンで、さらに指導も上手い海堂コーチは、女性から大人気だった。

それもそのはず。厚みのある、鍛え抜かれた胸筋。また、影をつくるほど割れた腹筋は、その下に隠されている男性器を想像させるように官能的だった。

その上、水泳選手特有の逆三角形を描く肩の筋肉と、こぶが盛り上がる上腕筋。張りのある若々しい肉体。

あんなたくましいカラダに、抱きしめられたら…。

昼の部のレッスンも圧倒的に主婦が多く、キャンセル待ちまであるらしい。

私と同じ夜の部に参加している青山さんは、いつも猫なで声でコーチにべったり付きまといっている。今だって青山さんを含む数人がこっちを睨んでる。

知らない人から余計な恨みは買いたくない。でも、このクラスの中で唯一泳げない私は、どうしたってコーチから指導を受ける回数是他の人よりも多かった。

「海堂せんせえ〜！私もバタ足うまく出来ないですう〜！」

「青山さん、順番に伺いますね。ケガしないように気をつけながら続けて下さい」
「はぁ〜い♡」

コーチのこういう優しさも、きっと人気の理由なんだろうなあ。

「…っ！」

青山さんの猫なで声に気をとられていたら、突然、右のおっぱいが大きな手に包まれた。

えっ、うそ…コーチに…おっぱい触られてる…？そんな、まさか……。

頭の中が真っ白になった。右のおっぱいだけが何かに包まれていて熱い。でも、コーチがそんなことをするはずがない。でもでも、いま私の隣にいるのはコーチだけ…。

「池内さん、足が止まってますよ」

「あっ……すみません……」

震える声で何とか返事をした。バタ足を再開しながらも、自分の体に意識が集中してしまふ。お腹には、私の体を浮かせようと支えるコーチの左手。そして、右のおっぱいには……やっぱり気のせいじゃない。コーチの右手、ある…。

もにゅん、もみもみもみ

「……っ！」

動いてる…っ！コーチに、おっぱい揉まれちゃってる…ど、どうしよう……。

驚きのあまり、水面に浮かんでいるおしりにキュッと力を入れてしまった。弱々しくバタ足を繰り返しながら顔を右に向けると、真っ白な歯を見せながらニッと笑うコーチと目が合った。

普段と同じ爽やかな笑顔に、水中で起こっていることは気のせいなんじゃないかと思いかけた。でも、こうして見つめ合っている間にも、競泳水着にパツンパツンに閉じ込められているおっぱいを、力強く揉みしだかれている。

もにゅもにゅ、くりんっ

「あっ……」

揉みながらスリスリって動いてるコーチの指に、乳首の位置、バレちゃった…。

ど、どうしよう……。

探り当てられた乳首を、太い親指で何往復もこすられる。集中がそがれ、上手くバタ足をする事が出来ない。

くにくに…くにくに…

「んっ、く……」

ひうつ♡言わなきゃ…。やめてくださいって…だって、こんなこと……。

頭ではわかってはいるのに、快感と、憧れのコーチに触られているという内なる喜びで、言葉が出てこない。

コーチとのセックスは、レッスン中も、仕事でも、ベッドの中でも何度も夢想していたことだった。あのセクシーな肉体に抱かれたい。カラダの中で1か所だけ水着で隠されて

いるペニスが気になって仕方がない。

でもまさか、レッスン中に、しかも人がいるところで、こんな……………。

くにくにくにくに、ぐりゅん、ぐりぐりいつ

「っ…………♡♡」

やあっ♡コーチの触り方、すごくいやらしくて気持ちいい…♡乳首ほじくるみたいにな…。
もしかしてエッチ上手いのかな…。カッコいいし、今までいろんな女の子とエッチしたこ
とあるんだろうなあ…。

人前という状況すらどうでもよくなりつつ、もっともっととカラダが快感を求め始めた
頃、コーチの親指も左手もスッと離れてしまった。

「あ…………」

「池内さん、そのままバタ足を続けて下さい」

「…………はい…っ」

疼く私のカラダを置いてけぼりにして、コーチは他の女性の元へと移動してしまった。

どうしよう…乳首、硬くなっちゃった……。触られてない左側も、たぶん……。プール
から出たら、パツパツの水着から乳首が浮き出てるの絶対みんなにバレちゃう……！

乳首が勃起してる水着姿を見られるなんて、想像しただけで顔から火が出そうだった。

なんとか平静を装いながらコーチを目で追う。もしかして他の女性のカラダも同じように触ってるのかな…。

目を凝らして見ても、複数人のバタ足で揺れる水面の下は、何が起きているか全く分かっていなかった。

＊

九十分のレッスンを終え、窓の外はすっかり暗くなっていた。私たちのクラスが最後のレッスンで、プールの他のレーンにも、隣のサウナにも、もう誰も残っていなかった。

はあ…。今日は全然レッスンに集中出来なかった…。

レッスン中、海堂コーチに触られたのは、おっぱいだけじゃなかった。

おしりにくい込んだ水着をプールの中で直そうとした時、隣に立ってたコーチに水中で遮られ、代わりに水着を直されたことを思い出す。

あの時、間違いなくお尻を軽く揉まれた。皆にバレないくらい一瞬だったけど、水着の上からお尻の穴を2、3回ぐりぐりって指でほじくられた気もする…。

それだけじゃない。

水中で立ったまま、クロールの手の動かし方の確認を皆でしてた時も…。海棠コーチが生徒の隣に立って、1人ずつ順番に手の動きを指導していた。

そして私の番がきた時、クリトリスに何かが当たった。隣を見ても、コーチは爽やかに笑っているだけだ。彼は、首から下げていたホイッスルをいつの間にか外していて、ホイッスルの尖った部分を私のクリトリスに当て続けた。水着の上からカリカリと弄られて、人前なのに、ううん、人前だからこそ、なのかな…。最高に興奮してしまった…。幸い腰が揺れても、水面下だから他の人達には気づかれてなかったけど…。

あんなゾクゾクする快感…今まで味わったことない。皆がいる前でコッソリあんなことされちゃうなんて…。海棠コーチ、こういうのが好きなのかな。

でもどうしよう…。レッスンが終わったから、もうプールから出なきゃいけないのに、乳首、勃ったまま…。

「皆さんお疲れ様でした。この後シャワーを浴びて、気をつけてお帰り下さい。次のレッスンは水曜日です。池内さんだけはそのまま残って下さい。少し補習をしますね」

コーチの言葉に誰も疑問をもたなかった。それもそのはず。今日ビート板を最後まで手放せなかったのは私だけ。皆はもう泳げるようになってるんだから。

皆が挨拶をしながら去っていき、広いプールの中には、私とコーチだけがぽつんと残された。

＊

「……………」

何を言ったら良いんだろう。

レッスン中、どうしてあんなことしたんですか、とか？他の人にもしてるんですか、とか？ダメ、そんなこと怖くて聞けない…。

「さつ、補習を始めましょう」

「…よろしくお願いします」

「池内さんは力が入りすぎて体が沈んでしまう癖があるので、まずはシンプルに、水に浮く練習から始めましょう」

「はい…」

何事もなかったかのように始まる補習に、少し拍子抜けしてしまった。

私が自意識過剰なのか？まさか、さっきの出来事は私の妄想とか…？ううん、そんな

はずない。乳首もクリトリスも、触られた感触がたしかに残ってる。それに、体の奥の熱くなっところから、膣を通じて愛液がとろとろ流れ出てきてる。もっともっとって、興奮を求めて…。

「バタ足の練習の時と同じように、うつ伏せの状態でプールサイドに掴まって下さい。顔は水面につけずに」

「…はい」

私の高まる性欲を知ってか知らずか、コーチはいつものレッスン中と同じ爽やかな笑顔を浮かべ、テキパキと補習を進めていった。

「掴まったら地面から足を浮かせて。そうです、何もせず力を抜いていれば、体は自然と浮きますから」

気を取り直さなくっちゃ。泳げるようになりたいもん。

コーチの言う通りカラダの力を抜くと、肩甲骨とおしりが水面にぶかっ、と浮かんだ。この浮く感覚を忘れなければ…そう考えている最中、またしてもおっぱいを握られる感覚が走った。

もにゅもにゅ

「あっ…コーチ……!」

「ほら、お尻が沈みかけてますよ。力を抜いて」

おしりを軽くぺちんと叩かれる。

もみもみ、もみもみ

「はっ、はい……」

憧れのコーチにおっぱいを揉まれ、どうしたって全身が強張ってしまう。

もう周囲に人がいないせいか、さっきよりもおっぱいを揉む手に遠慮がなかった。大きさを確かめるように掴まれたり、手のひらで潰されたり、おっぱい独特の柔らかさを堪能するように、もみもみされたり。何も考えないように、と努力しても、結局は乳首をこすられ、快感に引き戻されてしまう。

「あ、ああ……っ」

「力を抜くのが難しいようですね。じゃあ先に、プールサイドでカラダをほぐす運動をしましょうか」

「はい……お願いします」

コーチ……どういうつもりなんだろう……。

私は……このまま続きがしたい。